

聖日礼拝説教要旨 【2012年10月7日】

「食卓からあふれる恵み」

ルツ記 第1章15節～16節
マタイによる福音書 第15章21節～28節

説教 村上修平牧師

本日は世界聖餐日です。世界中の教会で聖餐が行われ、世界中のどこにいても、私達は“ひとつ”という事を知るのです。

さて、本日のみことばには、“小犬”と“カナンの女”が登場します。この女には、ひどい病気にかかり、悪い霊に取り憑かれているとされていた娘がいました。色々な医者にかかり、様々な神々に祈って来た事でしょう。しかし、治らなかつたのです。そして、主イエスの所にやって来て、叫び続けます。弟子達はこの女を迷惑そうにします。主イエスも「わたしは、イスラエルの家の失われた羊以外の者には、つかわされていない」（マタイによる福音書15章24節）と女の願いを断ります。主はご自分の使命を告げたのです。しかし、女は諦めません。地面に頭を何度もつけて頼み続けるのです。主イエスは更に言います。「子供たちのパンを取って小犬に投げてやるのは、よろしくない」（26節）と。ところが、女はここで諦めないばかりか「…でも、小犬もその主人の食卓から落ちるパンくずは、いただきます」（27節）と言うのです。これを聞かれたイエスは、『おお！ あなたの信仰はなんと素晴らしいのか！』と仰いました。原語には感嘆詞があって、主イエスの感動が読み取れます。そして、主は「…あなたの願いどおりになるように」（28節）と仰り、その時に、娘は癒されたというのです。

私達はこの出来事から知ります。主イエスは、私達がどれくらい主を頼りにしているかを見ておられる事を。そして、その信頼に応えて神の力を現して下さるのです。ですから、“信仰”は、神の恵みが通り抜ける水路にたとえられると思えます。この水路が太ければ太い程、神の恵みが私達の人生に溢れるのです。主イエスは、私達の信頼や祈りに心を動かして下さるのです。その証拠に、この出来事の少し前の記事を読むと、主イエスはご自身の故郷ガリラヤでは敬われず、そこでは、あまり力ある働きをなさらなかった事が記されています。それは、人々が「この人は大工の子ではないか」（13章55節）と言って、主イエスを信じなかつたからです。そして、彼らは不信仰のゆえに、神の恵みを少ししか受け取ることができませんでした。

しかし、“カナンの女”はどうだったでしょう。主イエスに初めは無視され、外国人だからと断られ、あげくには“小犬”とまで言われました。

もし、私が同じ目にあったなら、怒ってその場を立ち去っていたかもしれません。ところが、女は主イエスを頼り続けました。

ところで、主イエスは外国人だから救わないなど本気で仰るお方でしょうか。そうではないでしょう。それなのに何故、そんな事を仰ったのでしょうか。主イエスはこの女が本気で主イエスを信じているか確かめたかったのではないのでしょうか。主はそうまでして、ご自分を頼ってほしいと願われたのです。へブル人への手紙には「信仰がなくては、神に喜ばれることはできない。なぜなら、神に来る者は、神のいますことと、ご自身を求める者に報いて下さることを、必ず信じるはずだからである。」（11章6節）と、あります。聖書は語ります。天地を創られた全知全能の神は、おられると。そして、信じる者は、神はおられるのだと、信じるのです。

しかし、神の存在を信じるだけでは、十分ではありません。世界の創り主にして全知全能なる神が、この私を愛して、私と共にいて下さる事を信じるのが“信仰”です。神は、神を求める者に応えて、必ず豊かな祝福を与えて下さると信じるのです。私達の生活の中で本気で神を頼り、大きな“信仰”を持って歩んで行くのです。“カナンの女”が本気で主イエスを頼ったのは、病の娘を、どうしても助けたかったからです。しかし、娘には、どうして自分が治ったのか分からないでしょう。主イエスに断られても、断られても願う。ここに、娘を愛する母の愛がありました。この大きな愛と信頼に、主は豊かに報いて下さったのです。

さて、旧約聖書のルツ記の中で、“ナオミ”は、夫と最愛の息子二人に先立たれ、絶望の中にありましたが、嫁の“ルツ”は“ナオミ”の側を離れず、彼女を献身的に支えました。この“ルツ”の姿は神の愛を表しています。私は神から愛されていない。と、感じている人がいるならば、私達の背後で、なりふり構わず祈っている誰かがいることに、心を向けて下さい。そして、人は誰かから愛されている事が分かれば強くなれます。自由になれます。主イエスを本気で頼り、その溢れる恵みを受け取り、生き活きと生きていきたいと願います。

（記 説教要約奉仕者）